



学校だより

たくま

白鷹町立荒砥小学校 令和 3年 6月25日

子どもの安心を生むために…

校長 菅原 透



例年より遅い梅雨入りとなりました。湿気の多さに閉口しつつ、この後迎える暑い夏への期待を含め、“四季を堪能できる幸せ”と考えているところです。

学校では、昨年できなかった水泳が始まりました。水に入ると自然に出てしまう“歓声”がプールに響き、感染対策を施しながら、久しぶりの水の感覚を楽しんでいます。泳ぐのがあたりまえの大人とは違い、初めて水に潜る子、泳ぎ方を覚えて25mに挑戦する子にとって、水は手ごわい相手です。やったことのない恐怖、できないという高い壁を乗り越えるのは至難の業とも言えます。私も監視と称して（虫が騒いで？）一緒に泳ぐ機会を作り、頭まで潜る、力を抜いて浮く、けのびで流れに乗ることができるよう指導しています。大事なものは、楽しい雰囲気づくりとともに、いっしょにいるから、いっしょにやるから大丈夫という安心感、この人とならできそうだとの勇気を与えること。手を添えて支え、目を合わせ、声をかけ続けて励ます…。子どもはすごい才能を持っていますから、ちょっとでも“できた感”を味わうと、あとは勢いに乗り、どんどん挑戦し始めます。そしてぐんぐん力をつけていくのです。1年間学べなかったハンディをものともしない、躍動と伸びを期待しています。

さて、マスクをつけるということ。感染予防に不可欠で、今や、着用は常識であり、見慣れた光景になっています。

でも、最近感じていることがあります。

大きな声を出さない配慮もありますが、マスクが声を遮り、中にこもり、なかなか聞き取れない。子ども達は元気にあいさつしているのかもしれないが、声が届きにくくなっているのではないかと…。声だけでなく、思いも届きにくくなっているのではないかと…。マスクで鼻と口を覆っていて相手が誰なのかがわかりにくい。それに顔の表情もわかりにくくなっている…。互いの思いが届きにくく、交わりにくくなっているのではないかと…。

このことによる子どもへの影響はどのようなのでしょうか。前述の水泳のように、子どもに安心感と勇気を与えるには、オーバーすぎるくらいの表現が必須で、身振り手振りはもとより、顔の表情や声のトーンが大きなカギ。それが、わかりにくい、伝わりにくいとすれば、子どもは間違いなく不安にかられることでしょう。何気ないスキンシップで、心の距離を縮めることに配慮しながら、マスク着用の際は、“目力”を最大限に活用したいものです。大きく見開いた目からは注目されていることが実感できる優しさが伝わり、目じりが下がった眼差しは、すてきな笑顔を思い浮かばせるでしょう。ちょっとした意識の変容は、この世の中だからこそ心がけたい私達の仕草につながります。子どもとのコミュニケーションや大人同士のつながり方を再確認し、絆を深めるチャンス到来ととらえ、生活してみてもよいかもしれません。

